

実践報告 (Report)

身近な自然環境を通した子どもの主体的な活動について

——年少児は苺摘みを通して何を学ぶか——

The Significance of Independent Children Activities in Local Natural Environment: What do 3-year-olds Children learn through picking strawberry

田口 真奈美*
TAGUCHI, Manami*
朴 信永**
PARK, Shinyoung**

要 旨

本研究では、カリキュラム・マネジメントを通して、幼稚園内の恵まれた自然環境を活かし、年少児が苺を収穫してみる中で何を身につけていくことができるかについて実践的に検討することができた。幼稚園に入園してきたばかりの年少児は、人的環境である年長児と一緒に苺摘みに挑戦してみることで、教師も驚くくらい赤い実だけを一人で摘めるようになった。その後、年少児は一クラスだけでも畑へ行き、上手にトマトやキュウリの収穫ができるようになっていった。これらは、園の「年間教育目標」をもとに年間指導計画を立て、学年の担当教員同士で具体的に話し合いをしながら共通理解を持ち、月案や週案、日案を作成し、子どもの姿をよく観察しながら必要な援助をしながらかかわっていき、その後の活動がどうだったのか、改善する所はどこかななどを分析しながら、また新しい指導計画につなげていった結果である。

キーワード：自然環境，年少児，主体的活動，カリキュラム・マネジメント

Key words：Natural Environment, 3-year-olds Children, Independent Children Activities, Curriculum Management

1. 研究の背景と目的

今、子どもたちの生活や遊びの環境は大きく変化してきている。以前は、春には草花遊び、夏は川遊び、秋は木の実などの自然物を使った遊び、冬は氷や雪遊びと、四季によって自然にかかわる遊びがたくさんあり、子どもたちだけで楽しむ事ができた。しかし現在は、田畑が住宅地に変わり、幹線道路でなくても車が行き交い、不審者も多い。子どもたちだけでは危険なので必然的に外へ出る機会が少なくなる。一番感性豊かな心を育てる大切な環境に子どもたちを導く事が難しい。

秋田 (2013) によれば、ホンモノとは自然物、四季と出会う中でその豊かさを味わう暮らしを保障してくれる。自然の物であれば子どもたちが自分で柔軟に考え、遊びを工夫する事もできるが、商業施設に出かけ一方的な刺激に対して楽しむだけでは、

* 曾野学園曾野第二幼稚園 ** 椋山女学園大学教育学部

本論文は、椋山女学園大学教育学部投稿・執筆規程により査読を受けた (2016年11月10日受付；2017年12月10日受理)。

子どもの育ちもなかなかうまくいかない。

しかし、少しまわりの大人が気をつければ、昔の子どもとまではいかないにしても十分色々な力を身につける能力は持っている。限られた環境の中でも子どもは子どもであり、力は無限大である。そう考えると、子どもたちがそこで日中の大半を過ごしている幼稚園での生活はとても重要であり、その中の教師の役割は大きい。若月(2009)によれば、幼稚園における環境を通して行う教育とは、子どもが自ら学びたくなるような環境を保育者が豊かに用意し、子どもがその環境にかかわることの意味を保育者が感じとり、子どもに達成感や成功体験を味わえるようにしていくものである。その環境教育の中でも畑の中で作物を育て、収穫し味わう一連の作業は幼い子どもたちにも一番わかりやすく、取り組みやすい自然の教育である上、何をどうすればよいかという事が理解できれば自ら進んでおこなう主体的活動がしやすい。

幸い本園には広い畑があり、春に苺やスナップえんどう、夏はじゃがいも・トマト・きゅうり・なす、秋にはさつま芋や落花生など様々な季節の作物を育て、収穫したての野菜をいただく機会が多い。本研究では、このような恵まれた環境を活かし、まだ入園して間もない、畑に作物がどのようにできているのかさえ知らない子どもたちが苺を何回も収穫してみる中で、何を身につけていく事ができるかについて、カリキュラム・マネジメントを念頭におき段階を追って考えていく事にする。

2. 方 法

(1) 実践対象

本研究は、2016年4月から5月にかけて、愛知県岩倉市にある学校法人曾野学園曾野第二幼稚園の年少児二クラス(42名、満3歳児混合)と年長児二クラス(44名)を対象にしておこなった。曾野第二幼稚園は、平成26年4月より保育所及び子育て支援施設が一体となった認定こども園である。

園の特徴としては教師の引率による徒歩通園をおこない、毎日の通園で体や忍耐力を鍛えると共に、反射・運動神経等の発達、交通安全の感覚を養うことなどをねらいにしている点があげられる。徒歩通園を通して年長児が年下の子の手をつなぎ登園をするという事は、異年齢とのつながりもでき、ひとつずつ学年が上がる中で自分がしてもらったことを今度は自分自身がするという流れが作られている。このように受け継がれていくつながりが人とかかわりの中での大切な経験のひとつになっている。

園の周辺環境は近年、名古屋市へのアクセスが良くなってきたという事もあり、ベッタタウンとしてマンション・一戸建てなどが増え、交通量も以前に比べると多くなってきている。しかし、園の周りは田畑に囲まれ、野鳥なども飛んできたりする、のどかな恵まれた環境であり、徒歩通園の中でまわりの自然にも目を向ける事ができ四季を感じることができる。

園の昼食は、お家の方の心のこもった弁当を持参するようにしている。まだ手のか

かる幼い子を持つ親が毎朝弁当を作るという事はとても大きな仕事であるが、それを負担と思わず、‘かわいい子どもの為に’と一生懸命に作ってくださっている。その事をいつも念頭に置き、子どもたちにも毎日感謝をしていただくようにして、親子のつながりを大切にしたいと考えている。

本研究における実践対象クラスの担任はそれぞれ1名ずつで、年長児クラスは年少・年中の頃から畑の作物の収穫や園外保育などをたくさん経験してきている。毎年4月、年長の子どもたちは、年長児になったばかりで緊張しながらも、年少児が入園するとトイレに連れて行ったり、クラスの移動時に手をつないだりと生活の手伝いをしている。年少児はまだ園生活に慣れず母親との離れ際に泣いたりする子もいるが、幼稚園に来てしまえば笑顔になり、砂場遊びを中心に楽しく過ごしている。4月の年少児は、好きな事には喜んで参加するが、興味のない事はやらず、自分勝手に行動する子が多いという段階である。また、近年‘気になる子’が増えており、診断名はついていないがこだわりの強い子や落ち着かない子、人とのコミュニケーションの取りづらい子がまわりの子とうまくかわかれず、トラブルになることも徐々に増えてきた。

(2) 年間教育目標および指導計画の概要

本園の年少児の年間教育目標は次の通りである。

- ・安定した気持ちを持ち、幼稚園生活を楽しむ
- ・自分をありのままに出しながら楽しく遊ぶ
- ・友だちと一緒にいろいろな遊びを楽しむ
- ・友だちや保育者に親しみ、信頼感ややさしい気持ちをもつ
- ・物事に生き生きとした興味を持ち、自分から取り組もうとする

本研究ではこの年間教育目標の中の「物事に生き生きとした興味を持ち、自分から取り組もうとする」という項目に焦点を当てて実践活動を進めていく事にする。本園は、年間を通して畑で野菜や果物を育てており、その栽培の年間計画は表1の通りである。

年長児は前年度、玉ねぎ、じゃがいも、にんじんなどを中心に収穫を体験しているが、年少児はほとんどの子が体験をしたことがない。苺は、4月下旬から5月中旬にかけて収穫できるので、どちらの学年も今年度は初めての収穫になる。本研究に関連した4月、5月の年少児の月指導計画は表2の通りである。

徒歩通園コースでも様々な自然に接する事ができるが、同じ場所に固定されないように園の周りを中心に毎日の通園コースとは違う場所にも出かけたりして、様々な畑の様子を見に行く事をねらいとしている。

表 1. 本園の野菜・果物の栽培年間計画

| 季節 | | 月 | 野菜・果物の苗植えと収穫 | | | | | |
|----|----------|------|--------------|-----------------------|--|----|--------------------------|--|
| 春 | 立春 | 2 月 | | | | | | |
| | 春分 啓蟄 | 3 月 | じゃがいも 苗植え | | | | | |
| | | 4 月 | | えだまめ いんげんまめ 苗植え | | | | |
| 夏 | 立夏 | 5 月 | | | きゅうり・ピーマン・ なす・トマト・おくら・ トウモロコシ 苗植え | | | |
| | 夏至 | 6 月 | 収穫 | | | | さつまいも 苗植え | |
| | | 7 月 | にんじん 苗植え | 収穫 | 収穫 | | | |
| 秋 | 立秋 | 8 月 | | | | | | |
| | 秋分 | 9 月 | | | かぶ・大根 苗植え | | | |
| | | 10 月 | | | えんどう・そら豆 苗植え (5 月収穫) | 収穫 | 苺 苗植え (4 ～ 5 月収穫) | |
| 冬 | 立冬 | 11 月 | 収穫 | 収穫 | たまねぎ 苗植え (6 月収穫) | | | |
| | 冬至 | 12 月 | | | | | | |
| | 大寒 | 1 月 | | | | | | |

表 2. 年少児クラスの 4・5 月の指導計画

| | |
|--------|---|
| ねらいと内容 | <ul style="list-style-type: none">・春から初夏の自然に触れる。・散歩や遠足に出かけ、園のまわりの様子を知る。・畑へ行き、野菜や果物の生長に気づく。 |
| 子どもの姿 | <ul style="list-style-type: none">・苺畑へ行き、白い花が咲いていたり、青い実がついていることに気づく。赤くなったら食べる事ができるのを楽しみにしている。 |
| 保育者の援助 | <ul style="list-style-type: none">・散歩遠足が楽しみになるようにたくさん話をしたり、絵本を読む。・年長組とペアになるので、話を素直に聞いて出かけるが、言う事を聞かない子は相手の子の負担にならないようにする。・年少組だけで出かける時は、教師の配置を増やし、安全に出かけられるようにする。・苺を摘む時は、他学年の摘んでいる所を見せてもらい、「赤い実」を摘むという事に気づく。 |

3. 実践活動の流れおよび結果

入園して2週間くらいたつと年少児が落ち着いてくるので、例年4月下旬頃に全園児でリュックサックを背負って園のまわりを歩き、弁当は園内で食べる散歩遠足をおこなっている。散歩のコースは十分に考慮しているが、4月下旬になると急に暑くなり、緊張していた子どもたちがわがままを言い始める頃でもある。この時期の週案及び本研究の実践日の日案は次に示す（表3、表4参照）。

表3. 年少児クラスの4/25～4/30の週案

| | |
|----------------|--|
| 先週からの 子どもの姿 | <ul style="list-style-type: none"> ・徐々に園生活の様子がわかってきて、元気に登園できるようになった子もいれば、反対に泣き出してしまう子もいる。 ・部屋の中を追いかけこしたり、いけないことをする子が出てきた。 ・弁当はみんなおいしそうに食べている。 |
| 週のねらい | <ul style="list-style-type: none"> ・喜んで登園する。 ・遠足に出かけ、春の自然に気づいたり、おいしく弁当を食べる。 ・正しい生活の仕方やきまりを覚える。 |

全体的には少し落ち着いてきたとはいえ、最近では1か月以上登園を渋ったり、泣いたりする子もあり、手をつないでもらう年長児の負担にならず、みんなで楽しく散歩遠足ができるようにという配慮を中心に、当日のねらいと援助を考えた。

表4. 年少児クラスの4/26の日案

| | |
|-------|---|
| 日のねらい | ・散歩遠足に出かけ、春の自然に触れる。 |
| 教師の援助 | <ul style="list-style-type: none"> ・年長組に連れていってもらうので、素直に話を聞くように伝える。 ・年長組の発見に驚きながら、たくさん感じられる事を認めていく。 ・歩き疲れて途中で泣き出す子は、教師が手をつなぎ、年長組の負担にならないように配慮をする。 |

この散歩遠足のコースの中に苺畑が入っており、前を通った時、ふとした子どもの会話が聞こえてきた。年長児が一生懸命に年少児に話しかけているが、年少児にあまり反応がないのである。

| | | |
|-----------------------|------|----------------------|
| 4月26日 | 散歩遠足 | 年長組と手をつなぎ、苺畑の横を通る。 |
| 子どもの姿 | | 教師の援助・考察 |
| 年長A：わあ、白いお花がたくさん咲いてる！ | | 年少児は、何かな？と見ているが、遠くから |
| 年長B：苺が赤くなってよ。見て、Cちゃん | | なので、苺だとはよくわかっていない。 |
| (年少児)！ | | |
| 年少C：……？ | | |

まず、年長児の言葉かけに反応が薄かったことに驚いた。知らない事にしても一生懸命に見ようとしたり、言葉を返したりできるはずだがそれもなかった。年少児たちがもっと苺に関心を持つと思っていたが、年少児は歩くのに精一杯で、周りの様子にあまり関心がなく、年長児の話にもついていく事ができない子が多いと感じた。保育後の職員会議の時、当日の子どもたちの様子を担当の5人で話し合った。年長クラス

の子どもたち自身もまだ年少児を連れていく事に慣れていない時期に、当日は特に暑く、子どもたちにも余裕がなかったのではないかという意見が出された。年少児は苺が大好きで、摘んでもらったものを保育室で食べてはいたが、いくら本を見せたり話をしても畑とは結びついていない状況であった。やはり子どもたちは自分の手で収穫するという体験が大切だという結論になった。しかし、すぐに畑へ行けばできるというものではないので、段階を踏んで、年少児が収穫できるように次は「年長児の収穫する姿を見て、苺の探し方や摘み方、食べ物としての扱い方を知る」という目標を立てた。その週の週案及び日案は次の通りである（表5、表6参照）。

表5. 年少児クラスの5/2～5/7の週案

| | |
|-------|---|
| 子どもの姿 | <ul style="list-style-type: none"> ・入園から泣いてなかった子が泣き出したが、比較的最小な元気に来る事ができている。 ・散歩遠足は天気がよく、とても暑い日だったこともあり、途中で泣き出す子がいた。 ・お手洗いの使い方が上手になってきた。 ・五月人形を何度も見に行くうちに、「大将」に親しみをもつようになってきた。 |
| 週のねらい | <ul style="list-style-type: none"> ・ゴールデンウィークの間だが、元気に登園する。 ・子どもの日のお祝いに参加し、元氣よく楽しく過ごせる事を嬉しいと感じる。 ・年長組に苺畑へ連れていってもらい、摘み方を知る。 |

ゴールデンウィークの最中なので旅行に出かける子がいたり、父親が休みだと一緒に休んでしまう子もいるが、前日に「明日は年長児と苺摘みに行く」という話をして年少児が楽しみに登園できるようにした。畑までは年長児に連れていってもらうが、一緒に摘むと年長児が大変なので、まずは「見る」という事を重点にした日案を考えた。

表6. 年少児クラスの5/2の日案

| | |
|-------|---|
| 日のねらい | ・年長組が苺を収穫する姿を見て、探し方や摘み方など、食べ物の扱い方を知る。 |
| 教師の援助 | <ul style="list-style-type: none"> ・年長組に連れていってもらうので、話を素直に聞き、安全に出かけられるように伝える。 ・畑では年長組の苺摘みの様子に関心を持てるように声をかけていく。 ・子どもの近くの畝にある苺を摘んで見せたり、年長組が摘んだ苺の入ったボウルを見せ、どんな苺を摘んでいるのか（真っ赤になったもの）がわかるようにする。 |

年少児クラスに苺摘みの様子を見に行くという話を前日からしておいたので、朝から「まつさん（年長児クラス）と一緒に苺畑へ行くんだよね」「大きいのあるかな？」という会話が合った。苺摘みに子どもたちの関心が向いてきたようだった。

畑へ行く道すがらまわりの景色を見たり、子どもたちの会話は散歩遠足の時より弾んでいた。畑に着くと年長児が「見ていてね」と声をかけ、畑の中に入っていた。年少児はしばらくは年長児の様子を見ていたが、摘む所が葉に隠れて見えなかったこともあり、徐々に土を触ったり、立ち上がってフラフラと歩こうとしたり集中が切れてきた。ちょうど目の前に苺があり、移動しなくても摘むことができたので、予定にはしていなかったが担任がひとりひとり手を添えて摘み方を伝えていき、年長児と同じように一つだけ摘んでボウルに入れるように伝えた（写真1）。

| 5月2日 年長組といちご畑へ行く。 | |
|--|---|
| 子どもの姿 | 教師の援助・考察 |
| <p>年長A：Cちゃん、ここで見ていてね。おいしいいちごをたくさん摘んでくるから。</p> <p>年少C：うん。</p> <p>年長A：こんなのがあったよ！</p> <p>年少C：おおきいね！真っ赤だね。</p> <p>年少C：食べたいな。</p> <p>年長A：砂がついているから、幼稚園で洗って食べようね。</p> <p>年少C：うん！</p> | <p>今日は苺を摘むと伝えてあったので、Cはとても楽しみにしている。</p> <p>初めは興味を持って見ていたが、そのうち飽きてきたようだったので、ひとりひとり摘み方を教えひとつ摘んで年長児と同じようにボウルの中に入れた。</p> <p>とても素直に話を聞き入れ、うれしそうだった。</p> |



写真1. 5月2日の苺摘み

今回は年少児も苺畑へ行き、苺摘みの様子を見るという目的を理解していたので、興味を持って苺畑へ出かける事ができた。ねらいにはなかったが、摘み方も個々に伝えることができたので、次回は年長児と行くことはせず、年少児クラスだけで行く事にした。しかしたくさん摘むと青い実まで摘んだり、だんだんいい加減になって苺を大切に扱わなくなってしまうかもしれないので、両手にひとつずつでどの子も目で見て理解できる数である2個だけを摘むという事にした。そして次週のねらいは、「2つ摘むという約束をし、『2』という数を自分で理解して赤い大きな苺を摘む」と「食べ物を大切にし、優しく扱う」という事に設定した。

次の週の週案及び実践日の日案は次の通りである（表7、表8参照）。

この週は参観日もあり子どもが浮足立つと園外に出る事も危険になるので、たくさん外で遊んで充足感が持てるようにし、室内では落ち着いた生活を心がけて過ごした。同時に前回同様苺畑の話をしなが、今度は年少児クラスだけで苺摘みに行く事が楽しみになるように話をしていた。

表 7. 年少児クラスの5/9～5/13の週案

| | |
|----------------|---|
| 先週からの 子どもの姿 | <ul style="list-style-type: none">・連休が続いたが、登園を渋る事なく元気になる子が多かった。・落ち着いて生活できる子と、自分を出すようになって走りまわったり、危ないと注意しても聞かない子の差が大きい。・子どもの日のお祝いのたけのこご飯を、ほとんどの子がおいしく食べた。 |
| 週のねらい | <ul style="list-style-type: none">・戸外で元気よく遊ぶ。・幼稚園で元気にすごす姿をお母さんに見てもらう。・苺畑へ出かけ、自分たちで収穫したものをおいしく味わう。・身のまわりの事を自分でおこなう嬉しさを感じる。 |

表 8. 年少児クラスの5/13の日案

| | |
|-------|--|
| 日のねらい | <ul style="list-style-type: none">・道中車に気をつけながら苺畑に出かけ、自分で苺摘みをする楽しさとおいしさを味わう。（2つ摘むということで、数を理解する。食べ物優しく扱う事を知る。） |
| 教師の援助 | <ul style="list-style-type: none">・道中は車に気をつけ、右端を歩く事を伝える。長い列にならないように促す。・真っ赤な苺を摘むように話をし、理解ができないと予想される子（特に満3歳児）はあらかじめ教師がそばで見守り、できなければ一緒に摘んでみる。・苺はつぶれてしまうので、優しく摘み、幼稚園まで持って帰るという事を知らせ、摘んだ後の見通しが立つようにしておく。・苺に気を取られ、道路の真ん中に出ていかないように気をつける。 |

年少児クラスだけで園外に出るのは初めてなので、交通安全に気をつけ、無事畑に着く事がまず第一であったが、年少児同士で手をつなぎ道路の端を落ち着いた足取りで畑まで行く事ができた。畑に着くと、教師が初めに赤い大きな苺を2個摘んで両手に持ち、「赤くて大きな苺をひとつ、ふたつ。手にひとつずつ摘むんだよ」と子どもの前で説明をしてから自由に畑の中へ入るようにした。苺は2、3日摘まないようにしていたので、大きな赤い実も子どもたちの摘む分は十分にあった。

| 5月13日 年少組だけでいちごを摘む。 | |
|--|--|
| 子どもの姿 | 教師の援助・考察 |
| 教師：（片手ずつ見せ）いちごはひとつ、ふたつ、これだけ摘んでね。赤くて大きな実を見つけてね。 | 誰でも見てわかる数にし、自分で考えられるようにした。Cだけではなく、どの子も上手に大きな実を2つ摘んだ。しかし、早く摘んだ子は待っているうちに少し潰れてしまい手が赤くなる。 |
| 年少C：どれかな……。あ、あった！ 大きいのがあった！ | 少し苺が潰れてしまったが、自分で摘んだ物の方がよいと思ったので、安心するように声をかけた。 |
| 年少C：（泣きそうになって）先生、手が真っ赤。 | 幼稚園までふたつの手にそっといちごを入れて持ち帰り、どの子も満足そうに食べていた。 |
| 教師：幼稚園で洗えば大丈夫よ。 | |

前回の年長児の摘み方を覚えていて、畝にのぼったりする子もおらず、広い畑で一つの場所にかたまることなく目の前にある大きな苺を摘んでいった。苺を2つという約束を守り、ほとんどの子が片手に一つずつ摘むと畑から出てきた（写真2）。どの子も真っ赤で大きなものを摘んでいたが、広い苺畑をゆっくりと探す子とさっと摘んでしまう子に時間差ができ、早くに摘んだ子が少し苺を潰し手を赤くしてしまった。手が赤くなったことに驚き、泣きそうな顔になっていたのを、そっと持つ事と幼稚園に帰って手を洗えばよいと声をかけると安心したようだった。みんな摘み終えた



写真2. 年少児だけの苺摘み（5月13日）

ところで帰園して、たらいの水で苺を洗い口に入れた時の顔はどの子も本当に満足そうだった。

一日の様子を見て、保育後の年少児クラスの会議の中で、年少児だけでも畑全部の苺摘みができるのではないかとという事になり、苺も最盛期に比べ少なくなってきたので、次回は年長児に代わって年少児クラスの子どもたちだけで苺を全部摘んでくるようにしようという話し合いをした。保育のねらいは「食べごろの苺の見分けをつけながら摘む」「自分から積極的にたくさん摘む（ボウルをいっぱいにするという、目で見てわかる目標を立てておこなう）」に設定した。次の活動の週案と日案は次の通りである（表9、表10参照）。

表9. 年少児クラスの5/16～5/21の週案

| | |
|----------------|---|
| 先週からの 子どもの姿 | <ul style="list-style-type: none">・ゴールデンウィーク明け泣いてくる子は少なかったが、入園当初から登園を渋っている子がやはり泣いてきた。しかしその子も母の日運動会（参観日）は泣かなかったり、少しずつ良くなってきている。・母の日運動会をきっかけに、用意ドンで走ったり友だちと追いかけてっこをしたりする姿が見られるようになった。・苺畑へ出かけ、他学年に食べてもらう事を楽しみにしながら収穫をしている。 |
| 週のねらい | <ul style="list-style-type: none">・戸外で元気に遊ぶ。・お父さんが来てくださる事を楽しみにしながら、遊戯や手遊びをする。・苺畑へ出かけ、収穫の喜びと共に他学年に食べてもらう嬉しさを感じる。・友だちや教師の話を素直に聞く。 |

表10. 年少児クラスの5/19の日案

| | |
|-------|---|
| 日のねらい | <ul style="list-style-type: none">・食べごろの苺を自分で進んで見つけて摘む楽しさや、それを他学年の子に食べてもらう嬉しさを感じる。 |
| 教師の援助 | <ul style="list-style-type: none">・畑へ行ったらもう一度どんな苺を摘むとよいかを子どもたちと一緒に確認をし、たくさん摘むように励ます。・ボウルを持っていき、そこに山盛りになるようにと話をし、子どもの目安になるようにする。・子どもの声に耳を傾けながら、教師も一緒に摘む。・頑張ったたくさん摘んだ事をほめ、達成感を味わうと共に、他学年におすそ分けをする事も楽しみにできるようにする。 |

自分たちで苺摘みをした事が嬉しかったようで、また苺摘みに行くという話をする
と今度はたくさん摘みたいという声が子どもたちからあがってきた。たくさん摘んだ
らどうするかと尋ねると、「まつさんときくさん（年長・年中児クラス）に食べても
らう！」という答えが返ってきた。

今まで年長児に苺を摘んでもらいおいしくいただき、そのうれしさがわかっている
年少児なので、今度は自分たちが他学年におすそ分けができるという事をとても楽し
みにしているようだった。年少児クラスの皆が苺畑に着くと、自由に畑に入り、苺を
摘み始めた。徐々に苺も赤い実ができなくなってきたいて、本当に葉の下から見つけ
られるのか心配だったが、畝の間にしゃがみ込みながら葉をよけ、一生懸命に赤く
なった苺を探していた。苺を摘む手つきも前回より優しく、手が赤くなる子もほとん
どいなかった。ボウルも予定通り2個分が山盛りになったので、年少児たちも嬉しそ
うだった。

| 5月19日 年少組が畑のいちごを全部摘む。 | |
|--|---|
| 子どもの姿 | 教師の援助・考察 |
| 教師：今日はまつさん、きくさんにいちごを食 べてもらうから、いっぱい摘もうね！ | 前日から話をしておいたので、朝からみんな 張り切っていた。 |
| 年少C：よし、がんばるぞ！ | 自らしゃがんで葉をよけながらいちごを探し てる。みんな優しく摘み、ほとんど手も赤くな らない。大きいボウル2個分山盛り摘んだ。 |
| 年少C：まつさん、おいしいって言うかな？ | |
| 教師：きつと言うよ。 | |
| 年少C：うん。 | とてもうれしそうに返事をしていた。 |

苺摘みは教師も驚くくらい赤い実だけを摘むことができた。年少児も満足そうだった。
幼稚園へ戻ると昼食の時間に近かったので、とりあえずそのまま年長児の所へ苺
を持って行くように伝えた。昼食が済んだ頃、年長児が水道で手を洗っている年少児
を見つけ、「苺、おいしかったよ。ありがとう。いっぱい摘んだね」と声をかけてい
た。年少児もうれしそうにしていた。

その後、夏になりトマトやきゅうりができるようになった。年少児は一クラスだけ
でも畑へ行き、上手に野菜の収穫をするようになっていた。苺摘みの経験があったか
らこそその成果である。

4. 考 察

自然環境を介して学ぶべき事はとても多い。20年以上前、自然豊かな山の中で、
まわりの景色に全く目を向けず一心不乱にゲームをしている小学生を見かけた事があ
る。せっかくいろいろな事が感じられる場所に来ているのに素通りをしていた。それ
は自然に向き合った時の「楽しい体験」がそれまでになかったからではないかと思
う。自然は大きく、すべてのものを包み込む。その中で私たちは生かされており、
色々な事を感じていく。子どもたちが自然の中で視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚の五

感を使い、心が動かされ、その環境を通して主体的に活動する事はその子どもたちの心の成長にとって、とても大切である。

年少児はまだ幼稚園の生活も1か月あまりで、話を素直に聞き入れられなかったり、自分中心に行動する子が多いが、身近で関心のもてる「苺」を通して自分から進んで収穫できるようになった。そこには食べ物である「味覚」と、赤いという「視覚」が大きな役割を果たしている。本能的に感じることの多い子どもたちにとって、自然の中での経験はやはり素直に受け入れる事のできる貴重な経験である。

本研究を通して、「環境」は自然の事であっても「人的環境」が密接に関係している事に気づいた。今回の活動の中で、年長児の力の大きさを十分に感じる事ができた。年長児と一緒にこなう事で「目で見えて覚える」という事に加え、年少児一人ひとりに丁寧に関わってくれた年長児がいたからこそ、今回の年少児だけの苺摘みにつながっていったと思われた。それは、登園と降園時の手をつないでの徒歩通園や、戸外で一緒に遊ぶ、一緒に歌をうたうなどの何気ない日常のつながりが大きく関係しているといえる。幼稚園教育要領「人間関係」の内容の取扱いの中に、「自分の生活に関係の深いいろいろな人と触れ合い、自分の感情や意志を表現しながら共に楽しみ、共感し合う体験を通して、これらの人々などに親しみをもち、人とのかかわることの楽しさや人の役に立つ喜びを味わうことができるようにすること」とある。異年齢の交流は、お互いを刺激しあえる。年長児は年上という自覚を持ち、「教える」「伝える」という事を本能的にこなう。そして優しい。年少児は年上を敬いながら、素直に話を聞く事を学んでいく。人に優しく接する、相手の気持ちを考えるという人とのかかわりの根本を教えてもらう本当によい機会になった。また、幼稚園教育要領の総則の中には、「幼児の主体的な活動」という言葉が出てくる。「主体的な活動」とは、具体的な経験を通して生きる力の基礎となる心情・意欲・態度を育てるという事である。これを個々の教師の感覚や思いだけで育てていくというのは難しい。園の「年間教育目標」をもとに年間指導計画を立て、学年の担当教員同士でより具体的に話し合いをおこない共通理解を持ち、月案や週案、日案を作成する。そして子どもの姿をよく観察する中で必要な援助をしながら関わっていき、その後の活動がどうだったのか、改善する所はどこかなどを分析しながら、また新しい指導計画につなげていくという事が大切になってくる。このことをカリキュラム・マネジメントという。つまり、カリキュラム・マネジメントとは、保育計画（Plan）→保育実践（Do）→自己評価・相互評価（Check）→保育の改善（Act）、具体的には①幼児の理解に基づく指導計画の作成、②環境構成と活動の展開、③幼児の活動に沿った必要な援助やかかわり、④実践の記録と分析、⑤反省と評価に基づいた新たな指導計画の作成の循環を実践しながら、教育課程や指導計画が上手く発展するように管理する事であり、これは園がもつ教育力につながっていく（生田，2016）。そしてカリキュラム・マネジメントは、幼稚園の特色を構築していく営みであり、園長のリーダーシップの下、全ての教職員が参加することが重要である（幼児教育部会における取りまとめ、平成28年7月11日

文部科学省教育課程部会教育課程企画特別部会)。本研究はほんのわずかな活動ではあるが、このカリキュラム・マネジメントをおこないながら、子どもたちの主体性を育てていくという保育のねらいで実施した。そのねらいはほぼ達成でき、これからの私たち教師の指導計画への取り組みの第一歩になったのではないと思う。

5. 今後の課題

近年、子どもの発達が以前に比べて遅く、とても幼いと感じる。それは核家族などの家族構成やライフスタイルの変化が要因のひとつであると考えられるが、生きる力やたくましさを持った子の減少はこれからの社会に大きな影響を与えていくと思う。これからは更なる子どもの主体性が確保できるような活動を工夫していき、生きる力をもった、心のつよい子どもになっていくように努力していきたい。

本研究を通して、子どもの主体性を育む為の活動のひとつとして自然環境を活用することはとても有効であるという事がわかった。今後はものづくり、遊びなど他の分野にもカリキュラム・マネジメントを徹底し、子どもがより主体性を持って活動できるようにしていきたい。そして本研究により、子どもたちが主体的に活動をするためには、教師も主体的にならなくてはいけない事にも気づいた。ただ、教師の主体性は、鯨岡（2010）が「一方的に子どもをリードする事が‘保育者も主体’ではない」と述べているように、教師が自分の思いを子どもに押しつけるものではない。それを踏まえた上で、「子どもの主体性と保育者の意図のバランスが子どもの発達に必要な経験である」（若月，2009）という事を念頭に置いて、子どもがいきいきと活動する為の環境構成や援助を考える事が重要である。

現在、本園では、外部講師による園内研修を通して、年間指導計画の再編に取り組んでいる。指導計画は、子どもの生活（遊び、人とのかかわり、自然との触れ合い、ことばなど）のあらゆる分野から見ていくが、全職員で検討をし、ひと通り形は整った。今後はそれを具体的な形にして保育におろし、子どもをよく観察しながら園全体で多方面から見た意見・アイデアを取り入れていく事が大切である。そしてその結果を精査し、子どもがより充実した園生活を送れるよう修正をしていく必要があると考えている。私たち子どもにかかわる者は、将来のある大切な子を育てているという自覚をもち、入園から卒園までの子どもの育ちを見通し、しっかりと地に足のついた大人になる為の「こころのたね」が植えられるようにしていかななくてはいけない。

謝 辞

この研究をまとめるにあたり大勢の方に御助言、御指導を頂きました。いつも畑の世話や収穫を手伝ってくださる櫻井和義様、遠藤政隆様、曾野第二幼稚園園長廣中弘子先生、主任深田美子先生、年長組担任小林真奈美先生、稲田麻友先生、年中組担任

山田真里先生，飯田有咲先生，年少組担任坂田早百合先生，満3歳児担任犬飼菜月先生，フリーの小林葉子先生に心よりお礼を申し上げます。なお本論文の結果の一部は平成28年度幼稚園教育理解推進事業（愛知県協議会）の幼稚園教育課程講座研究協議において発表されたものです。

■引用文献

- 秋田喜代美（2013）秋田喜代美と安見克夫が語る写真で見るホンモノ保育—憧れを育てる— 秋田喜代美・安見克夫（共著） ひかりのくに，66-69.
- 生田弓恵（2016）愛知県協議会平成28年度幼稚園教育理解推進事業講演会—幼稚園教育要領の理念を実現するための，各幼稚園における教育課程の編成，実施，評価，改善の一連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について— 平成28年5月30日.
- 河邊貴子（2008）教育課程保育課程論 河邊貴子（編） 東京書籍，6-9.
- 鯨岡峻（2010）保育・主体として育てる営み ミネルヴァ書房，24-26.
- 文部科学省（2008）幼稚園教育要領第1章総則，第2章ねらい及び内容 フレーベル館.
- 若月芳浩（2009）保育内容「環境」 柴崎正行・若月芳浩（編） ミネルヴァ書房，3-17.